

アリストテレス『哲学について』Fr.26における

「神」の概念

——キケロによる資料に基づいて——

赤井 清晃

Kiyooki AKAI

小論は、初期アリストテレスにおいて「神」または「神性（神的なもの）」とは何であるか？という問題¹⁾に対して、アリストテレス初期の対話篇『哲学について』²⁾の資料として、キケロによる資料として一般に採用されている、断片26(Ross)³⁾に基づいて、また、テクストをこれに限定して⁴⁾考察を加えることに

1)ここで、「神」または「神性（神的なもの）」というのは、「神」および「神的なもの」を一括して表現する適切な言葉がないために用いているのであって、「神」あるいは「神性（神的なもの）」のどちらか一方という選択を意味するのではない。

2)アリストテレスの『哲学について』が、3巻からなる対話篇であったことは、ほぼ間違いのないこととされている（Rose, *De Aristotelis librorum ordine.*, 1854, p106）。その第1巻は、ギリシアだけでなく東方を含めた人類の知恵の歴史とその考察を内容とし（Bernays, *Dial.*, S.97; Jaeger, *Arist.*, S.130sq; Düring, *Arist.* S.185），第2巻は、プラトンのイデアやイデア数に関する学説を叙述し、これの批判的考察を内容とすると考えられるが、プラトンに先立ついわゆる自然学的学説の叙述とそれについての批判的考察をも含んでいたと想定される（Bernays, *Dial.*, S.S97-99）。そして、第3巻は、「神」と宇宙に関する考察を内容としていたと考えられる（Bernays, *Dial.*, S..108sqq）。

3)断片26(Ross)は、キケロの『神々の本性について』（Cic. *De Natura Deorum*, 1, 13, 33）から採られているが、内容は、エピクロス派のウェルレイウス(Velleius)が語るアリストテレス批判という形になっている。

4)また、小論が、アリストテレスにおける前述の意味での「神」または「神性（神的なもの）」とは何であるか？という問題の解明のために、まず、初期アリストテレスの『哲学

よって、初期アリストテレスにおける「神」または「神性（神的なもの）」の概念を明確にすることに僅かながらでも資せんとするものである。

I

断片26(Ross)は、以下のようになっている。

Aristotelesque in tertio de philosophia libro multa turbat a magistro suo ⁵⁾ Platone dissentiens. modo enim menti tribuit omnem divinitatem, modo mundum ipsum deum dicit esse, modo alium quendam praeficit mundo eique eas partes tribuit ut replicatione quadam mundi motum regat atque tueatur. tum caeli ardorem deum dicit esse, non intellegens caelum mundi esse partem, quem alio loco designarit deum. quo modo autem caeli divinus ille sensus in celeritate tanta conservari potest? ubi deinde illi tot dii, si numeramus etiam caelum deum? cum autem sine corpore idem vult esse deum, omni illum sensu privat, etiam prudentia. quo porro modo mundus moveri carens corpore, aut modo semper se movens esse quietus et beatus potest?

アリストテレスも、その著『哲学について』の第3巻において、自分の師であるプラトンと見解を異にすることによって、多くの混乱を引き起こしている。実際、アリストテレスは、あるときは、すべての神性(divinitas)を精神(mens)に帰したり、あるときは、世界そのもの(mundus ipse)が神(deus)であるとしたり、またあるときは、他の何らかの神を世界の上に置いて、その神に、世界の運動を何らかの循環運動によって支配し、保持するという役割を帰しているからである。また、アリストテレスは、天の火(caeli ardor)が神であると言っているが、その際、他の箇所ではアリストテレス自身が、神であるとした、その天が世界の部分であることを理解していない。しかし、その神的感覚(divinus sensus)は、いかにして、このように速い天の運動の中で保持され得るのだろうか？また、もし我々が、天をも神に数えるならば、あの多くの神々はどこにいることになるのだろうか？し

について』のFr.26に限って考察するのは、物理的制約によるものであって、本来、他の箇所についても考察するべき、より包括的な研究の一部をなすものである。

5) uno, A, B.

かしました、アリストテレスは、神は身体なしであるとしようとしているのだから、神からすべての感覚も、また思慮をも神から奪っているのである。そして更に、世界は身体を欠いて、どのようにして運動することが出来るのであろうか？ 或いは、世界は常に自らを動かしていながら、どのようにして平静であり至福であり得るのであろうか？

注3に言及したように、エピクロス派からのアリストテレス批判という文脈⁶⁾で語られているこの箇所は、幾多の研究者によって扱われてきたが、解釈が様々で、共通した理解を得ることは難しい。しかし、Bos⁷⁾によれば、少なくとも、次の4点については、ほぼコンセンサスが得られている。

1) 第一に、このエピクロス派の人物は、アリストテレスの(哲学的)神学がまったく混乱していると言ってアリストテレスを非難していることは明らかである。

2) 次に、この人物はアリストテレスとその師プラトンの見解の相違に言及しているが、最も信頼できる写本は、suoの代わりにunoと読んでいる⁸⁾という問題がある。

3) 混乱が生じる原因は、アリストテレスが、「神」または「神性(神的なもの)」に関して、次の4つの仕方で語っていることである。テキストによれば、アリストテレスは、「神」または「神性(神的なもの)」を次のものと関係付けて用いている。

- (a) 精神(心)
- (b) 世界(宇宙)
- (c) その他の物体
- (d) 天(天界)の物質(もの)

キケロのテキストでは、それぞれ、以下のようになる。

6) Bignone, Vol.2, p.52, n.144 参照。

7) Bos, *Cosmic and Meta-Cosmic Theology*, p.186.

8) これに関しては、Untersteiner, p.255sq 参照。

- (a) modo enim menti tribuit omnem divinitatem
- (b) modo mundum ipsum deum dicit esse
- (c) modo alium quendam praeficit mundo eique eas partes tribuit ut replicatione quadam mundi motum regat atque tueatur.
- (d) tum caeli ardorem deum dicit esse

4)最後に、ウェルレイウス（このエピクロス派の人物）は、（自分が）概略を述べた（アリストテレスの）神学的（神についての理論の）体系の内的矛盾と完全な不合理性を、勝ち誇るかのように証示している。

これらのうち、1)と4)については問題はないと思われるが、2)と3)については、検討が必要である。ただし、小論では、キケロのテキスト校訂上の問題としての2)の問題⁹⁾には原則として立ち入らず、主に3)を問題とせざるを得ない。

II

次に、従来¹⁰⁾のいくつかを、適宜、コメントを加えながら瞥見する。

W.Jaeger

Jaegerによれば、『哲学について』は、アリストテレスがプラトンとは根本的に異なる哲学的見解を表明し始めた著作であり、「神とは、世界がそれに従属している超越的な不動の動者である。神は、世界をその目的因として導くが、それは、神の純粋な思惟によってである。これが、アリストテレスの形而上学の新しい核である」。¹¹⁾ Bos¹²⁾によれば、「それゆえ、Jaegerは（キケロのテク

9)大方の校訂(Rossもこれに属する)に従って、小論では、suoを読むことにする。

10)なお、以下の諸解釈への言及のうち、小論の末尾の文献表になく、フットノートにのみ、典拠が記されているものは、Bos, pp.186-190に依った。また、Chroust, *Aristotle: New light on his life and on some of his lost works*, 2vols., London, 1973, pp.175-193.の研究史についての記述は、詳細で参考になるが、Chroust自身の解釈は不明である。Bosがこれに言及しないのは、ここに理由があるかもしれない。

11)Jaeger, Engl.Transl., p.139.

ストの) *alius quidam*を*mens*と同一視する」のである。同一視するがゆえに、前述のように考える，のではない。その逆なのである。なお，このエピクロス派の人物が，アリストテレスも世界（宇宙）を神的であると言うのは，ある誤解に基づいているのであり，Jaegerによれば，アリストテレスが *cosmos*と言うとき，天（天体）を意味していたはずである¹³⁾，ということになるが，*mundus, caelum* とアリストテレスの用いていたはずのギリシア語との対応関係がかならずしも明らかではない，と言わなければならない。実際，Effeは，この点でJaegerを批判している¹⁴⁾。

H von Arnim

ArnimのJaegerに対する批判のポイントは、『哲学について』でのアリストテレスは，Jaegerの言うようには不動の動者という考えには至っておらず，それはもっと後になってからのことである¹⁵⁾，という点にある。その際，問題となるのが，キケロのテキストにおけるウェルレイウスの言葉の扱いである。

Arnimは，*replicatio*が目的因としての不動の動者が全体としての自然に及ぼす影響を意味するとは決して考えられないとして，それは単に天体の運行にのみかかわるものと解している。また，*alius quidam* は*mens*ではなく，そのことは，アリストテレスが，最高の神的実在としての（外側の）天球とそれに従属する形での，天体（惑星）の領域を区別していることから推測できる¹⁶⁾，とする。しかし，この時点でのアリストテレスが，神を，一方では，不動の動者ではなく，最高の神的実在としての（外側の）天球としていたとすれば，他方で，ウェルレイウスの言葉にあるように，*sine corpore*と言うことには矛盾がある¹⁷⁾ことを認めざるをえないことになる。

12)Bos, op.cit., p.186.n.7.

13)Jaeger, Engl.Transl., p.139.

14)Effe, S. 159, n.10.

15)Arnim, 'Die Entstehung der Gotteslehre des Aristoteles', in F.P.Hager, *Metaphysik und Theologie des Aristoteles*, Darmstadt, 1969, ss.1-74.

16)Arnim, op.cit., ss.1-4.

17)Arnim, op.cit. , ss.4-5.

W.K.C. Guthrie

Guthrie¹⁸⁾ はAnimの線でJaegerに対する批判を行なっている。すなわち、『哲学について』でのアリストテレスは、Jaegerの言うようには不動の動者という考えには至っていないというのであるが、「アリストテレスがどのように感じていたせよ、アリストテレスの心性は唯物論的なそれではなかった」¹⁹⁾と言う。

J.Moreau

Moreau²⁰⁾は、『哲学について』に関して、un véritable hylozoismeを唱えて、プシューケー論では、第5元素を魂を構成するものとし、『哲学について』での神は、形而上学的な神ではないと言うが、当該のキケロのテクストに関しては、*alius quidam*を天（天球）と看做すことによって、Animの解釈に修正を加えている。

H.Cherniss

Cherniss²¹⁾の論点は、アリストテレス独自の第5元素の学説が、天体を独立したものとして提示し、不動の動者を認める可能性を消してしまう、ということにある。当該のキケロのテクストについて言えば、最高の神性としての非質料的なヌースを提示しており、自然のすべてがそれを目的因としている、という。従って、最高の神性に従属する形での神的実在²²⁾は、どういう仕方によってかは全く不明であるが、おそらく惑星の運行のようなもの、ということになる。

18)Guthrie, 'The development of Aristotle's Theology', *CQ*27(1933), pp.162-172 and 28(1934), pp.90-98.

19)Guthrie, *Art.cit.*,p.169. なお, *Aristotle On the Heavens*(Loeb CL, London, 1939), p.xxxii, n において, 以前の言い方は行き過ぎだったとしている。

20)Moreau, *L'âme du monde de Platon aux Stoiciens*, Paris, 1939; repr. Hildesheim, 1965, p.122.

21)Cherniss, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*, Baltimore, 1944; repr., New York, 1962, Appendix 10, pp.581-602. 特に, p.591以降。

22)Cherniss, *op.cit.*, p.595.

E. Berti

Berti²³は、当該のキケロのテクストにおけるウェルレイウスの前述の4つの「神」または「神性（神的なもの）」の規定を検討して、矛盾するものを排除するか、矛盾する意味を排除することによって、矛盾する点をアリストテレスの主張とは認めないことによって整合性をもたせようとしている。

- (a) modo enim menti tribuit omnem divinitatem
- (b) modo mundum ipsum deum dicit esse
- (c) modo alium quendam praeficit mundo eique eas partes tribuit ut replicatione quadam mundi motum regat atque tueatur.
- (d) tum caeli ardorem deum dicit esse

(a)と(b)は基本的にこれを認める。問題は(c)と(d)であるが、(c)に関しては、*alius quidam*を(a)の*deus-mens*としての不動の動者と看做し、その一方で、可視的な世界（宇宙）としての*mundus*を認めて、この*mundus*も、(b)で言われる全体としての*mundus*の一側面であるとする²⁴ことによって整合的に理解しようとしている。また、(d)に関しては、「神性（神的なもの）」の2つの概念²⁵を認めることによって、その一方が*caeli ardor*という言い方で言及されている、としている。

J. Pépin

Pépin²⁶にとっても、キケロのテクストの*alius quidam*をどう解するかがポイントとなるが、*replicatio*を、実はすでにMoreauによって指摘されていたような、プラトンの『ポリティコス』²⁷を念頭において、*ἀνείλιξις*と*ἀνακύκλῃσις*との関連を主張するが、プラトンと当該の箇所でのアリストテレスの見解の決定的な

23)Berti, pp.375-392.

24)Berti, op.cit., pp.378-379; p.383.

25)Berti, op.cit., p.383. due concetti del divino すなわち, il Dio supremo trascendente il mondo と il Dio cosmico(= il mondo stesso) .

26)Pépin, *Théologie cosmique et théologie chrétienne*, Paris, 1964, pp.135-172; 216 sqq.

27)Platon, *Politicus*, 270D3; 286D.

違いとして、プラトンのほうは、唯一の神について語られているという点を指摘する。けれども、結論としては、*replicatio*を天（天球）の運動と看做すことによつて、*alius quidam*を天（天球）と看做すことになり、Moreauと同じである。ただし、Pépinは、おそらく、(c) *modo alium quendam..... tueatur.*に基づいて、（恒星）天よりもさらに上位に、第5元素のアイテールによる天を想定しているのは奇妙である、とBos²⁸⁾はコメントしている。

E.Effe

Effe²⁹⁾によれば、『哲学について』における「神」は、世界（宇宙）を秩序付ける原理としての、そして同時に純粋な知性としての「神」である。そして、彼は、Pépinとともに*replicatio*を、単なる円運動としてのἀνειλιξιςと看做すが、Pépinとは違って、*alius quidam*を不動の動者と解している。

B.Dumoulin

Dumoulin³⁰⁾によれば、当該のテクストでは、世界（宇宙）を支配する神と、支配される世界そのものとは、明確に区別されていたはずであり、従つて、この神は、超越的な不動の動者と言ってもよいことになる。また、この神によつて引き起こされる*replicatio*は、単なる「反対の運動」ではなくて、「天の二重の（裏表のある）運動」であるという。また、Dumoulinは、*alius quidam*と*mens*を相互に同一視³¹⁾している。

従つて、全体として、Dumoulinは、Jaegerの解釈に戻っている面がある。特に、この『哲学について』の時期に、超越的な不動の動者といってもよいものを認めるところにそれが現われている。

A.P.Bos

Bos³²⁾の解釈にとって問題となるのは、『哲学について』でのアリストテレス

28)Bos,op.cit., p.189.

29)Effe, SS.157-162.

30)Dumoulin, pp.44-52.

31)Dumoulin, op.cit., p.50.

32)Bos, op.cit., pp.190-200.

に、コルプス（「著作集」）にあるような形而上学的神学がすでにあったのか、それとも、この時点でのアリストテレスの「神」は、超越的ではなく、（宇宙）内在的であるという意味で、内在的・宇宙論的神学であったのか、という点である。結局のところ、Bosは、「神」にある意味で超越的側面と内在的側面を認めている。彼は、Arnimとそれに従った人達が、Jaegerを批判する際に、Jaegerが *alius quidam* を、直ちに、不動の動者と同一視した点を衝いているのは正しいが、かといって、内在的・宇宙論的神学を『哲学について』に認める、ということにもならないと言う。つまり、Jaegerほど極端ではないが、何らかの形而上学的神学を認める余地があるということであろう。

当該のテキストの解釈としては、まず *alius quidam* を、*Nous*（知性的存在）と看做す。しかし、これには次のような前提がある。それは、「神的存在が世界（宇宙）を支配する」という場面に先立って、一般に「何かがあるを支配する」というとき、その「支配する」という活動は、アリストテレスにおいては、「観想的領域」とは明確に区別された「実践的領域」に属する。ところが、プラトンにおいては、いわゆる「哲人統治者（哲人＝統治者）」の理想に示されるように、「実践的領域」と「観想的領域」とは結びついていなければならなかった。アリストテレスにあっては、『哲学について』においても、これら2つの領域は、区別された「2つの神的存在」³³⁾に帰せられる、と言う。その一方が、*Nous*（知性的存在）と言われ、もう一方が、*alius quidam*と言われる（が、これらは、同じ「神的存在」の2つの側面であるから、これらがどの次元で区別されるかが問題であるが、この点に関しては、Bosは明確に述べていないように思われる）。そして、Bosによれば、区別は、そのまま、人間の世界にも適用され、*Nous*（知性的存在）としての哲学者の助言を受けつつ、実際に統治する統治者（*Nous* = 哲学者+ 統治者）というモデルをアリストテレスに帰している。Bosのこの解釈は、想定としては興味深いが、当該の箇所から、ここまで言えるのか、という疑念を禁じ得ないし、更に、プラトンに「哲学者= 統治者」というモデルを帰し、それに対して、アリストテレスに「哲学者+ 統治者」というモデルを帰すことに関しても、「哲学者+ 統治者」というモデルこそ、まさにプラトンが、現実に、シュラクサイにおいて行なったことではなかったのか、と反論³⁴⁾したくなるどころである。

33)Bos, op.cit., pp.192.

34)これに対して、Bosは、それこそアリストテレスがプラトンから学んだことだと言うかもしれないが。

また、*replicatio*については、Bosは上述の区別された「2つの神的実在」の活動に対応して、世界（宇宙）の中でのいわば物理的運動と、*Nous*（知性的存在）のいわば知性的活動とに分け、その両方の可能性のうち、*replicatio*に後者、すなわち、*Nous*（知性的存在）の知性的活動³⁵⁾の可能性があることを強調する。それは、物理的運動の生じる世界（宇宙）を超越した*Nous*（知性的存在）としての「神的実在」による、一種の知性作用である、というのだが、これに対しても、*alius quidam*の解釈に対するのと同様に、その依って立つ、区別された「2つの神的実在」の問題点を衝くことによって反論可能であろう。

III

以上のような諸解釈が生じた事情は、（当該箇所以外の断片資料を含めて）与えられたテキストの解釈として、それが生じたというよりも、解釈する者の側に、アリストテレスの世界（宇宙）と「神」についてのある一定の固定観念とも先入観ともいふべきものがある、それらが、この箇所の読み方に、現れただけである、と言えるかもしれない。従って、小論の結論もまた、それらと同類のものである可能性をもっていることは否定できないが、しかし、少なくとも、次の点は確認できるであろう。

- 1) 当該箇所のウェルレイウスの批判の中では、「神」が唯一であるか、複数であるかは明らかではない。少なくとも、明示的に唯一であることが示されていない。
- 2) ウェルレイウスの批判の中で用いられるラテン語に相当する語をアリストテレスが用いていたとすれば、そして、ウェルレイウスの批判にもかかわらず、それらが矛盾することなく整合的に理解できるとすれば、「神的なもの」と言われる可視的な物体を比喩的に「神的なもの」と解するのが、一つの解決策である（例えば、Bertiが行なったように）。
- 3) 知性・精神（*mens=omnis divinitas*）としての世界（宇宙）を支配すべく、世界（宇宙）の上に置かれる *alius quidam* と「神」との関係について、*alius quidam*を知性・精神（*mens*）と看做すにせよ、それ以外の何らかの「神的実在」と看做すにせよ、その際に、解釈者は、アリストテレスにはもともとなかったかもしれない、超越的側面と（宇宙）内在的側面の区別を「神」に持ち込んでしまっているのではないか。

35)Bos, *op.cit.*, p.200.

特に、最後の点については、当該箇所以外との関連で、稿を改めて考察を加える必要がある。それが、「『哲学について』の解釈はすべて、推測にならざるを得ない」³⁶⁾としても。

(広島大学文学部・講師)

文献

- Arnim, 'Die Entstehung der Gotteslehre des Aristoteles', in F.P.Hager, *Metaphysik und Theologie des Aristoteles*, Darmstadt, 1969, ss.1-74.
- Bernays, J., *Die Dialoge des Aristoteles in ihrem Verhältnis zu seinem übrigen Werken*, Berlin, 1863.
- Berti, E., *La filosofia del primo Aristotele*, Padova, 1962.
- Bignone, E., *L'Aristotele perduto e la formazione filosofica di Epicuro*, 2 voll., Firenze, 1936.
- Bos, A.P., *Cosmic and Meta-Cosmic Theology in Aristotle's Lost Dialogues*, Leiden, 1989.
- Chroust, A.H., *Aristotle: New light on his life and on some of his lost works*, 2vols., London, 1973.
- Dumoulin, B., *Recherches sur le premier Aristote (Eudème, de la Philosophie, Protreptique)*, Paris, 1981.
- Düring, I., *Aristoteles. Darstellung und Interpretation seines Denkens*, Heidelberg, 1966.
- Effe, B., *Studien zur Kosmologie und Theologie der Aristotelischen Schrift „Über die Philosophie“*, München, 1970.
- Gigon, O., *Aristotelis Opera III*, Berlin, 1987.
- Jaeger, W., *Aristoteles. Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*, Berlin, 1923(1955). (Engl. Transl., Oxford, 1934, 1948²)
- Rackham, H., *Cicero: De Natura Deorum, Academica*, Loeb Classical Library, 1933(1956).
- Rose, V., *De Aristotelis librorum ordine et auctore commentatio*, Berlin, 1854.

³⁶⁾Chemiss, op.cit., p.592.

Rose, V., *Aristotelis qui ferebantur librorum fragmenta*, Leipzig, 1886.

Ross, W.D., *Aristotelis fragmenta selecta*, Oxford, 1955.

Untersteiner, M., *Aristotele: Della Filosofia: Introduzione, testo, tradizione e commento esegetico*, Roma, 1963.

Walzer, R., *Aristotelis dialogorum fragmenta*, Firenze, 1934.